

副詞的用法のアマリの意味制限

要旨

本論文では、「あまりのXに」と「Xのあまり」の二つの構文を比較し、容認性に差が生じる要因を考察し、アマリの性質や特徴を明らかにすることを目標とした。観察の結果、「あまりのXにY」は基本的に容認可能であり、Xがプラスの原因を示す場合にはYもプラスの結果を示し、Xがマイナスの原因を示す場合にはYもマイナスの結果を表し、さらにXはYの時点で過去の事象であっても良いことが明らかになった。また、「XのあまりY」は、Xの過度な感情、状態により起こる話者自身でも意外な結果としてYが起こる、という意味であり、そのため、Yは通常、マイナスの結果を表し、しばしば「Xに起因して我慢ができずにYしてしまった」というような衝動性があり冷静な判断を欠いた状態を表す。さらに、「XのあまりY」の場合、XはYと同時性があり過去ではないこと、そして、話者の主観としては、「あまりのX」よりも「Xのあまり」のほうが程度が大きいということを主張した。また、「あまりのXにY」のほうは文中で意味的にXが強調されるのに対し、「XのあまりY」は意味的にYのほうが目立つということを指摘した。

言語学・応用言語学分野

1LT05036Y

2005(平成17)年入学

兼行 裕

2012(平成24)年1月提出

目次

1. 問題提起	1
2. 本論文の主張	3
3. 「あまりの X に Y」について	4
3.1. 「あまりの X に Y」が、容認可能な場合	4
3.1.1. プラスの原因の X にプラスの結果の例	4
3.1.2. マイナスの原因の X にマイナスの結果の例	8
3.1.3. プラス、マイナスのどちらにも判断可能な X と Y	15
3.1.4. まとめ	19
3.2. 「あまりの X に」が、容認しにくい例	20
4. 「X のあまり Y」について	23
4.1. 容認可能な「X のあまり Y」	23
4.2. 評価や判断を伴わない客観的な状態なら容認不可能である。	25
4.3. 「評価、判断」単体なら容認可能である。	28
4.4. 「評価、判断」に修飾するものが加わると容認度が下がる。	30
4.5. 分類の判断が分かれるもの	32
5. 「あまりの X」 < 「X のあまり」となる場合	36
6. まとめ	37
参考文献	38

1. 問題提起

「あまりの X に Y」という構文は、X というものの程度が極端に高いことや極端に低いことにより、当然の結果として Y という事象が起こることを表している。

一方、「X のあまり Y」という構文は、X というものの程度が極端に高いことや低いことにより、意外な結果として Y という事象が起こることを表している。例えば Y が行為の場合、話者は冷静に判断して行動したわけではなく、X の過度さに触発され思わず Y したという状態になることが伺える。話者が思わず Y してしまうという結果には、話者の衝動的な行動の結果として Y が起こる、という含意がある。

「後述する通り、従来の研究では「あまり」について、否定と呼応する表現と、肯定と呼応する表現の二つに焦点をあてて言及しているものが多く、「あまりの X」「X のあまり」といった形式で取り扱っているものは少ない。挙げるとすれば、服部(1993)の補説で「あまりの N」、「N のあまり」、「V あまり」について軽く触れているが、これについては後に紹介する。本論文では「あまりの X に」「X のあまり」の形式で使用される表現に特化して考察する。これらは、どちらも「あまりにも X なので」という意味で使用され、X はその後の句の原因となるものを表している。そして、それぞれが何らかの因果関係をもつ結果として何かが起こったり、あるいはそれぞれに従属する要素が X を原因とした結果として発生した状態の場合に、これらの表現は使われる。「あまりの X に Y」と「X のあまり Y」は、互いに言い換えることが可能な表現であるが、言い換え不可能な場合もある。例えば(1)は言い換え可能な例である。

- (1) a. あまりの楽しさに時間を忘れた。
- b. 楽しさのあまり時間を忘れた。

一方、(2)を見てほしい。「あまりの成績に」はそれほど違和感を感じないが、「成績のあまり」とは言いにくい。よって、(2)の場合「あまりの X に」は容認可能であるが、「X のあまり」は容認不可能であるということが言える。つまり(2)のような例においては、「あまりの X に」と「X のあまり」という文は言い換えることが不可能な文である

- (2) a. あまりの成績に二度見した。
- b. *成績のあまり二度見した。

このように、同じ用法としてアマリが使用されているにもかかわらず、容認性に差が生じるということは、「あまりの X に」と「X のあまり」の間には何らかの違いが生じて

いるということを示唆する。この違いは何によるものであるか、ということの本論文では問題にしたい。

この問題に対して、「あまりの X に Y」と「X のあまり Y」において存在している表現の差異を考えたい。そのためには、(1)のようにどちらも容認可能な場合の文の条件と、(2)のようにどちらか一方が容認可能となり、もう一方が容認不可能となる場合の文の特徴や条件を比較、検討することにより、これらの表現の間にある差異をとらえたい。このようにして、明らかとなった差異をもとに、「あまりの X に」と「X のあまり」の双方に違いが生じる法則性が見出したい。そして、その法則に基づき比較検討することにより、アマリというものについてより深くその特性を明らかとすることができるだろう。さらに、このことはアマリという表現への理解を深めることにも繋がると考えられる。したがって、この「あまりの X に」と「X のあまり」の違いを問題にすることは、アマリのもつ文法的性質や特性を考えることにおいて、大変重要である。

本論文では扱わないが、アマリが含まれる文にはほかにもいくつかの用法がある。須賀(1992)ではアマリについて程度副詞「あまり」の用法には否定と呼応するものとし、ないものがあると分類されている。また、服部(1993)では「あまり」の用法は基本的に二種類に分けることができることを述べており、第一の用法として「否定と呼応」する場合の「弱否定型の用法」、第二の用法として「過度型の用法」として述べている。(3)のように東瀬戸(2000)でも、須賀の述べている「あまり」の用法に触れ、その確認として現代語の程度副詞「あまり」の用法について言及している。

- (3) a. 物事の程度が、必要、期待以上に及ぶさまにいう。(度を過ぎて、非常に。)
- b. (下に打消しの語を伴って)それほど、たいして、あんまりの意味を表すもの。(程度が甚だしくないこと。一般の程度を越えるほどではない。ひかえめな否定を表すものもある。)

[東瀬戸 2000:163]

また、西(2005)でも同様に、アマリは否定形と呼応する形式(2)と、肯定形と呼応する形式(3)の二つの用法があると述べている。

- (4) あまり感心できない。 [西 2005:45]

- (5) あんまり(あまり) おいしかったので、つい食べ過ぎた。 [西 2005:45]

以降では、上述した「あまりの X に Y」と「X のあまり Y」の違いが何であるかという問題に対する答えを主張したい。

2. 本論文の主張

本論文では、(6)-(8)を主張する。

- (6) a. 「あまりの X」の文は基本的に容認可能である。
- b. 「あまりの X に Y」について、プラスの原因の X にはプラスの結果の Y、マイナスの原因の X にはマイナスの結果の Y になる。
- c. X は Y の時点で過去の事象であっても良い。
- (7) a. 「X のあまり Y」について、X の過度な感情、状態により起こる話者自身でも意外な結果としての Y により、Y はマイナスの結果になる。
- b. 「X のあまり Y」は、X に起因して我慢ができずに Y してしまったというような、衝動性があり、冷静な判断を欠いた状態を表す。意外性や驚きも内包する。
- c. X はその時、瞬間的なもので、Y と同時性があるため、過去ではない。
- d. 話者の主観的な程度の強さとして「あまりの X」 < 「X のあまり」になる。
- (8) 「あまりの X に Y」は、文中で意味的に X が強調され注目されるのに対し、「X のあまり Y」は文中で意味的に Y のほうが注目される結果となる。

主張における、プラスやマイナスとは、X や Y が持つ性質の程度の方向性を示したものである。程度の方向性とは、X や Y の程度が、例えば大きい小さいかで表現できる場合、X や Y がどちらに向いているかを表すものである。このとき、文中で意味的にその両方向にとれるものは解釈が両極端にとれるということになる。一方で、どちらか片方の場合は、解釈が一方方向にしかとれないということになる。解釈として両極端にとれる場合というのは、X となる部分に入る名詞が過度な方向性を含意として持っていない場合や、その名詞自体に方向性が含まれておらず、解釈としてどちらに極端なのかが指定されていない場合である。解釈が一方方向にしかとれないのは、X となる部分に入る名詞が方向性を持っている場合である。

3. 「あまりの X に Y」について

3.1. 「あまりの X に Y」が、容認可能な場合

「あまりの X に Y」は、わずかな例外はあるものの、(6a)で主張するとおり、ほとんどの場合において、容認可能である。以下でその例を提示する。

3.1.1. プラスの原因の X にプラスの結果の例

「あまりの X に Y」の構文は、(6b)で主張するとおり、「あまりの X に Y」について X がプラスの原因の時、Y もプラスの結果になる。X がプラスの原因の時、Y もプラスの結果とは、プラスの原因となる X に起因して、「過度な X が原因でプラスの結果としての Y という事象が起こっている」という意味である。ここでは程度の方向性を表すために、(9)で言えば「楽しさ」というものについて、その程度が大きいのか小さいのかということを示す意味で、(→楽しさ 大)と表記する。以下の例文も同様である。ここでは「楽しさ」というプラスの原因に、「時間を忘れた」という、話者が時間を忘れるほど没頭できたという意味で、話者にとってプラスの原因 X に起因したプラスの結果 Y となっている。

(9)で、「あまりの X に」の X に当たる部分では「楽しさ」というもの過度な様子を表現している。「楽しい」ということは話者にとってプラスなことであると考えられる。「あまりの楽しさに」で、「あまりにも楽しかったために」という意味を表しており、これは話者にとって「楽しさ」という X にあたる部分がプラス方向に極端であるということを表している。Y に当たる部分として「時間を忘れた」ということが起こっているが、「楽しさ」に起因して話者の「非常に楽しかった」という結果に示されるように、X である「楽しさ」の強調として表現されている。X がプラス方向に極端なために Y もプラスの結果を示している。

- (9) あまりの楽しさに時間を忘れた。
→楽しさ 大

(10)では、「あまりの X に」の X に当たる部分では「嬉しさ」というもの過度な様子を表現している。「嬉しい」ということは話者にとってプラスなことであると考えられる。「あまりの嬉しさに」で、「あまりにも嬉しかったために」という意味を表しており、これは話者にとって「嬉しさ」という X にあたる部分がプラス方向に極端であるということを表している。Y に当たる部分として「飛び上がった」ということが起こっているが、「飛び上がった」というのは「嬉しさ」に起因して嬉しさの表現として話者に生じたプラスの結果と考えられる。「嬉しさ」に起因して話者の「非常に嬉しかった」ことの強調として表現

されている。過度な「嬉しさ」という話者にとってプラスの原因に、プラスの結果である。X がプラス方向に極端なために Y もプラスの結果を示している。

- (10) あまりの嬉しさに飛び上がった。
→嬉しさ 大

(11)では、過度な「可愛さ」という話者にとってプラスの原因に、「抱きしめそうになった」という「可愛さ」に起因して話者に起こるプラスの感情の表れとしてのプラスの結果になっている。

- (11) あまりの可愛さに抱きしめそうになった。
→可愛さ 大

以下の例も同様に話者のプラスの感情、感覚の表れにプラスの結果としての状態になっている。

- (12) あまりの美しさに息をのんだ。
→美しさ 大

- (13) あまりのおいしさに無表情ではいられなかった。
→おいしさ 大

- (14) あまりの走りたさにマラソンに出場した。
→走りたさ 大

ここまでは話者の直接的な過度な感情や感覚に起因する X であったが、ここからは直接的に話者の感情と関わっているというわけではなく話者の判断によって X の極端さが表されている例を挙げる。

ここでは、(15b)のように「成績」で考えると、「あまりの成績に」といえば、どちらかといえば成績は非常に悪いほうにとれ、非常に良いという解釈はしづらいような印象を受けるため、「成績」そのものの例の分類としてはマイナスとなり、二度見したという Y にあたる部分もマイナスになる。しかし、ここで(12a)のように「好成績」と「好」と指定されることで「成績」単体ではマイナスの解釈であったものがプラスのベクトルに変換されている。これにより、「好成績」という話者にとってプラスの原因に、「二度見した」という意外性を伴うプラスの結果が起こっている。

- (15) a. あまりの好成績に二度見した。
→成績 良い
b. あまりの成績に二度見した。
→成績 悪い

以下の例も同様に話者にとってプラスの X にそれに起因したプラスの Y になっている。

- (16) あまりの誠意に感動した。
→誠意 大
- (17) a. あまりの第一印象にほかの人の存在が霞んだ。
b. *(意味的に)あまりの第一印象に誰も彼女の存在を覚えていなかった。
→印象 強い
- (18) a. あまりの手応えに合格を確信した。
b. ??あまりの手応えに落ちたと思った。
→手応え 大

ここで(19b)のように、「あまりの」の位置を「かっこよさ」という程度の方向性である X に近接する位置に置き換えると、(19a)のように「メガネの」という修飾されるものに挟まれて離れている場合よりも、より話者の「かっこよさ」に対する強調の様子が伺える。

- (19) a. あまりのメガネのかっこよさに惚れた。
b. メガネのあまりのかっこよさに惚れた。

以下の例も同様に「あまりの X」で程度の方向性を示す X のすぐ近くに「あまりの」が近接している方が、修飾するものが加わり位置的に離れるものの場合よりも話者の X の強調の様子が伺える。(20a)、(20b)では、飛行機の特徴となる「大きさ」という程度の方向性が示されている。それに対して、(20c)は飛行機の特徴を示す表現がないために、飛行機のどんな性質についての極端さを言及しているのかということがわからず、程度の方向性自体がない。そのため、「あまりの飛行機に」となると、飛行機の何が極端であるのかが解釈できない。よって、程度の方向性がない場合の(20c)は、「あまりの」とあるのにも関わらず極端さを示しておらず、容認度が下がる。また、(20b)が(20a)の場合よりも「大きさ」が話者によって強調されているように、ここでも同様に、「あまりの」の位置を「大きさ」

という程度の方向性を示すものに近接させると、X の部分が強調される。

- (20) a. あまりの飛行機の大きさに甥が喜んでた。
b. 飛行機のあまりの大きさに甥が喜んでた。
c. *あまりの飛行機に甥が喜んでた。

以下の例も同様に、程度の方向性が指定されていない X について、修飾する部分により程度の方向性が表現されていた場合、その方向性の指定を除外すれば、X についての極端さを表せなくなり、文として容認度は下がる。(21)で、(21b)のように「真剣さ」をなくし、「あまりの主張」とした場合、意味としては、たとえば主張が素晴らしいものであったり強いものであってそれを認めざるをえないというような解釈ができ、意味として微妙な違いはあるものの容認度は変わらない。これは「主張」というものに「強い主張」や「素晴らしい主張」など、一般的に想定できる「程度の方向性」が内在しているからであると考えられる。

- (21) a. あまりの主張の真剣さに、認めざるを得ない。
→真剣さ 大
b. あまりの主張に、認めざるを得ない。

(22)では、(22c)のように「緑の多さ」の「多さ」という指定がない場合、少しわかりづらいものの取れる意味としてあまり変化はない印象を受ける。「あまりの緑に～」とすると緑が多いということ、または緑が濃いということが想像される。「多さ」という程度の方向性の指定をとっても意味的にそれほど変化がないということは、「緑」というものの中に、「多さ」や「濃さ」など一般的に想定される程度の方向性が内在しているからであると考えられる。

- (22) a. あまりの緑の多さに感激した。
b. 緑のあまりの多さに感激した。
c. ?あまりの緑に感激した。

(23)は、(23c)のように「根拠のない」がなければ、容認度が下がる文である。(23c)の「あまりの嫌疑に」は、あまりにも疑われていることを意図している。そのため、それ以降の句と矛盾し意味的につじつまが合わなくなる。

- (23) a. あまりの根拠のない嫌疑に被告はすぐに無罪が証明されるだろうと確信していた。

- b. ?根拠のないあまりの嫌疑に被告はすぐに無罪が証明されるだろうと確信していた。
- c. *あまりの嫌疑に被告はすぐに無罪が証明されるだろうと確信していた。

(24)は、(24b)のように「繊細さ」という指定がなく「音」だけの場合、「あまりの音に」となり、どんな音なのか明示的にされていない。「あまりの音に」という場合、うるさい音であるなどあまりにも酷い音という解釈が容易にできる。そのため音に「あまりの」とつくこの場合、マイナスの解釈としてとりやすい。ここでは、(24a)のように「程度の方向性」である「繊細さ」により方向性が指定されている。この指定により、どんな音なのかということが明確になる。

- (24) a. あまりの音の繊細さに誰もが聞き惚れるだろう。
- b. ??あまりの音に誰もが聞き惚れるだろう。

(25) あまりの毛先の自在な動きに感動した。

(26) あまりの剣の精巧な作りに職人の心を感じた。

3.1.2. マイナスの原因の X にマイナスの結果の例

以下ではマイナスの原因の X に、マイナスの結果が生じる例を挙げる。主張(6b)では、次のように述べている。

- (6) b. 『「あまりの X に Y」について、プラスの原因の X にはプラスの結果の Y、マイナスの原因の X にはマイナスの結果の Y になる。』

マイナスの原因の X にマイナスの結果の例というのは、プラスの場合と同様に、過度な X というマイナスの原因のものにより、Y というマイナスの結果が起こるという意味である。たとえば、(27)では、「あまりの痛さに」という X が「痛さ」の程度が過度であることを表している。そして「痛さ」ということが話者にとってマイナスであるために、X に起因する Y も、「泣いてしまった」という話者にとってマイナスの結果として生じている。

- (27) あまりの痛さに泣いてしまった。
→痛さ 大

(28)では、「あまりの X に」の X に当たる部分では「悲しさ」というもの過度な様子を表現している。「悲しい」ということは話者にとってマイナスなことであると考えられる。

「あまりの悲しさに」で、「あまりにも悲しかったために」という意味を表しており、これは話者にとって「悲しさ」という X に当たる部分がマイナス方向に極端であるということを表している。Y に当たる部分として「なにも考えられなくなった」ということが起こっているが、「悲しさ」に起因して話者の「とても悲しかった」ということ X の強調として表現されている。X がマイナス方向に極端なために Y もマイナスの結果を示している。過度な「悲しさ」という話者にとってマイナスの原因に、「なにも考えられなくなった」というのは「悲しさ」に起因して悲しさの表現として生じるマイナスの結果となっている。過度な「悲しさ」という話者にとってマイナスの原因により、「悲しさ」に起因して起こるマイナスの結果の「なにも考えられなくなった」ということが起こっている。

- (28) あまりの悲しさになにも考えられなくなった。
→悲しさ 大

以下の例も同様に話者の過度なマイナスの感情、感覚の X に起因してマイナスの結果として生じた Y となっている。

- (29) あまりの重さに手が折れるかと思った。
→重さ 大

- (30) あまりの眠さに起きていることができなかった。
→眠さ 大

- (31) あまりの空腹に石がおいしそうに見えた。
→空腹 大

(32)について、ここでは(32a)も(32b)も共に「痛さ」が強調されているのだが、(32b)のように「あまりの」の位置を入れ替えて X である「痛さ」に隣接した部分に「あまりの」が置かれることにより、(32a)のように「足の」という修飾するものに挟まれている場合に比べてより話者の「痛さ」の強調が伺える。

- (32) a. あまりの足の痛さに座り込んだ。
- b. 足のあまりの痛さに座り込んだ。
→痛さ 大

以下の例も同様に、「あまりの」が、X に隣接しているときのほうが、修飾するものに挟

まれて「あまりの」と X が離れているときよりもより話者の X に対しての強調が伺えるものである。

- (33) a. あまりの酒の飲みたさに断酒を破ってしまった。
b. 酒のあまりの飲みたさに断酒を破ってしまった。
→飲みたさ 大

ここまでは X は話者の直接的な過度な感情や感覚に起因している部分が大きかったが、ここからは直接的に話者の感情や感覚と関わっているというわけではなく、話者の判断により X が極端だと判断されている例を挙げる。(34)のように「あまりの状況に」というのは、あまり良い状況は想像できない。そのため、(34a)では、特に文に違和感はないが、(34b)、(34c)などのように「あまりの状況」の「状況」が良い状況を想定させるように後半の句を変えることにより、話者にとってプラスと考えられる文脈にした場合、文に違和感が出て容認度が下がる。状況は「良し悪し」の方向で考えると、程度は良い⇔悪いで、悪いとなり、状況の「激しさ」でとらえると、程度は高⇔低で、高と考えられる。よって、「あまりの状況に」と言った場合、X の「状況」は悪いものであったり激しいものであったりと、結果的に良い方向にとりづらい。ここでは「あまりの X に」の X の時点でマイナスの方向性が指定されているため、Y も必然的にマイナスになることになる。そのため、主張(6b)に従い、Y にあたる部分がマイナスの解釈である(34a)では容認可能となるのに対し、(34b)、(34c)のように Y にあたる部分にプラスの解釈がつくと違和感が生じ、容認度が下がると考えられる。

- (34) a. あまりの状況に混乱した。
b. *あまりの状況に順調さを感じた。
c. *あまりの状況にとても嬉しくなった。

(35)では、X である「態度」は、多くの場合、悪い態度というほうに解釈されるためマイナスの解釈となる。一見、とりようによってはプラスの解釈も不可能ではないようにも見えるが極端に良い態度という解釈は難しい。Y にあたる「驚いた」についても、X がマイナスな解釈なので話者にとってマイナスな驚きであったと考えられ、Y もマイナスの解釈となる。

- (35) あまりの態度に驚いた。
→一見、両方向に見えるが、態度は良い悪いで言えば、基本的に悪いほうにとれる。

(36)について考える。(36a)では、過度な「非常識さ」という話者にとってマイナスの原因としての X により、それに起因して「思わず手が出た」というマイナスの結果としての Y になっている。(36b)のように「非常識」を「常識」に置き変えた場合、「常識」という極端さを持たない性質の語に対して、極端さを表す性質の「あまりの」は不自然である。このように、「あまりの」と「常識」が互いに矛盾するものになるため、「あまりの常識」は容認不可能となる。加えて、この場合は「常識さ」という語句に問題があることもひとつの要因である。

- (36) a. あまりの非常識さに思わず手がでた。
b. *あまりの常識さに思わず手がでた。

以下の例も同様に話者にとってマイナスの X にそれに起因したマイナスの Y である。また、程度の方向性がその語句自体に内包されていない X について、修飾する部分により程度の方向性が表現されていた場合、その方向性の表現を除外すれば、X は極端さを表せなくなり、文として容認度は下がる。

(37)では、(37c)のように「薄さ」という程度の方向性の指定をなくした場合、「髪」は程度の方向性としての意味がそれ自体には含まれていないため容認度は下がる。しかし、ここで Y に「アデランスを勧められる」という一般的に薄毛治療として知られているものを勧められたという方向性についてのヒントがあるために、「髪」の程度の方向性として「薄い」のではないかということが予測される。しかしながら、(37c)はやはり容認度が下がる例である。

- (37) a. あまりの髪の薄さにアデランスを勧められた。
b. 髪のあまりの薄さにアデランスを勧められた。
c. ??あまりの髪にアデランスを勧められた。

(38)では、(38c)のように「の遅さ」がない場合、どの特徴についての程度の方向性なのかが不明瞭となる。「仕事」というものが持つ性質として、例えば高さや激しさなどが指定されていないので、(38c)のように「あまりの仕事に」では程度の方向性として不明瞭な例である。

- (38) a. あまりの仕事の遅さに腹が立った。
b. 仕事のあまりの遅さに腹が立った。
c. ??あまりの仕事に腹が立った。

(39)では、(39c)のように「あまりの遠さに」では程度の方向性としてはっきり「遠さ」と言及しているのももちろん容認可能だが、(39d)のように「遠さ」がない場合、「あまりの家に」では意味が通じなくなる例である。これは「家」というものに程度の方向性が内在されていないからである。

- (39) a. あまりの家の遠さに気が遠くなった。
b. 家のあまりの遠さに気が遠くなった。
c. あまりの遠さに気が遠くなった。
d. *あまりの家に気が遠くなった。

(40)では、(40c)のように程度の方向性を指定する「多さ」がない場合も、ほぼ同じ意味になると考えられる、程度の方向性として「あまりの人に」では、はっきり明示されていないため(40c)のように容認度は下がる。

- (40) a. あまりの人の多さに気分が悪くなった。
b. 人のあまりの多さに気分が悪くなった。
c. ?あまりの人に気分が悪くなった。

(41)では、(41b)のように程度の方向性を指定する「多様さ」がない場合、「あまりのデータ」だけでは、量、内容など、その極端さの内容としていろいろな可能性が想定可能である。程度の方向性として定まっていないため、(41b)のように容認度は下がる。

- (41) a. あまりのデータの多様さに一般化できずにいる。
b. ??あまりのデータに一般化できずにいる。

(42)では、(42d)のように「頭の堅さ」という指定をなくした場合「あまりの祖父に～」となり、容認不可能になる例である。

- (42) a. あまりの祖父の頭の堅さにため息がでた。
b. 祖父のあまりの頭の堅さにため息がでた。
c. ?祖父の頭のあまりの堅さにため息がでた。
d. *あまりの祖父にため息が出た。

ここまでは程度の方向性を示すと考えられる部分をなくした場合、容認度が下がる例を挙

げたが、ここからは程度の方向性を示すと考えられるものを除外しても容認度が変わらない例である。これは、Xとなる語に程度の方向性としての性質が内在されているものだからである。

(43)では、(43b)のように「騒音」の「騒」を除くことで程度の方向性の指定をなくしても、あまり意味が変わらない。これは「あまりの音」という場合、極端に大きい音であったり酷い音であることが想定されるためである。つまり「音」に想定される程度の方向性が内在していると考えて良い。

- (43) a. あまりの騒音に耳を覆った。
b. ?あまりの音に耳を覆った。

(44)では、(44c)(44 d)のように「雷」の場合は容認度は下がるものの、「雷」でも「恐怖」でもどちらかひとつで共に容認可能といえる例である。これは、「雷」でも「恐怖」でも程度の方向性が内在されているからであり、方向は共に「大」であるといえる。

- (44) a. あまりの雷の恐怖に犬が震えていた。
b. 犬が雷のあまりの恐怖に震えていた。
c. ?あまりの雷に犬が震えていた。
d. あまりの恐怖に犬が震えていた。
→雷 大?酷い。恐怖 大。

(45)では、(45b)のように「過度な」という程度の方向性の指定をなくした場合でも、「期待」はあると考えられ程度の方向性は「大」のほうにのみ解釈できる。(45a)も(45b)も意味としては変わらないが、この場合(45a)は「あまりの」と「過度な」が意味として重複しているため、文に違和感が出る結果となっている。

- (45) a. ?あまりの過度な期待に、潰されそうになる。
b. あまりの期待に潰されそうになる。
→ 期待 大

(46)では、(46c)の「あまりの光景」のように「光景」のみならず、目に余るような光景または驚くような光景なのだろうと想定できる。そのため程度の方向性としては激しいということができ、「光景」のみで成立するため程度の方向性は内在していると考えられる。

- (46) a. あまりの目を疑うような光景に眼科に行こうと決意した。

- b. ?目を疑うようなあまりの光景に眼科に行こうと決意した。
 c. あまりの光景に眼科に行こうと決意した。
 →光景 激しい
- (47) あまりの複雑さに投げ出したくなった。
- (48) あまりの不調に不安になった。
- (49) あまりのありえない発言に怒りを覚えた。
- (50) あまりの惨劇に目を覆った。
- (51) a. あまりの敵の強さにおじけづいた。
 b. 敵のあまりの強さにおじけづいた。
- (52) a. あまりの手際の悪さに手伝わざるをえなかった。
 b. ?手際のあまりの悪さに手伝わざるをえなかった。
- (53) a. あまりの荷物の重さに腰を痛めた。
 b. 荷物のあまりの重さに腰を痛めた。
- (54) a. あまりの道の多さに困惑した。
 b. 道のあまりの多さに困惑した。
- (55) a. あまりの堂々とした態度に威圧された。
 b. ?堂々としたあまりの態度に威圧された。
- (56) a. あまりの道の込み具合にルートを変更した。
 b. 道のあまりの込み具合にルート変更した。
- (57) a. あまりの試験のわからなさに投げ出した。
 b. 試験のあまりのわからなさに投げ出した。
- (58) a. あまりの彼の頼りなさに心細くなった。
 b. 彼のあまりの頼りなさに心細くなった。

- (59) あまりの物の知らなさに勉強が必要だと感じた。
- (60) a. あまりの彼の宇宙の広大さのアピールに疲れてしまった。
 b. 彼のあまりの宇宙の広大さのアピールに疲れてしまった。
 c. ??彼の宇宙のあまりの広大さのアピールに疲れてしまった。
 d. *彼の宇宙の広大さのあまりのアピールに疲れてしまった。
- (61) a. ?あまりの物語の飛躍した展開についていけない。
 b. 物語のあまりの飛躍した展開についていけない。
 c. ?物語の飛躍した余りの展開についていけない。

(62)は、「過ちをおかすこともある」と一般化しており、過去ではなく、未来のことでも可能な例であり、時制についての指定はない例である。これは、服部(1993)でも似たようなことが述べられているが、ここで述語には、「～に驚く」、「～に戸惑う」のように本来二格をとるとしている。「寒さに驚く」と言えるものと、「?つらさに仮病でさぼった」のように本来は二格を取りえないのだが、例外的に「～ニ」と共起するものがあることを述べている。そこで、(63)のように言えないとしているのだが、これは、こうした「～ニ」が(63)のようにある対象についての一般的な評価を表す述語とは共起しないことによるものであるとしている。

(62) あまりの無知に過ちをおかすこともある。

(63) ?この映画はあまりの残酷さに子供には見せられない。 [服部 1993: 470]

3.1.3. プラス、マイナスのどちらにも判断可能な X と Y

X と Y が示す原因と結果は必ずしも、プラス、マイナスに決まったものではない。以下で提示している例は、プラス、マイナスどちらにも解釈可能な原因や結果を表す例である。どちらともいえない原因の X というのは、解釈によってプラスともマイナスともとれる原因の X に、主張(6b)のとおり同じく X に起因してどちらにもとれる結果としての Y が起きているものである。これは、それぞれの例によっても異なるのだが、(64)のようにボタンの「サイズ」という大小どちらにも解釈可能なもののように、X の程度の方向性が指定されているものの、両極端などどちらの解釈も可能である例もあれば、(66)のように X の程度の方向性は指定されているのに解釈として X がその定まった方向に過度なことが話者にとってプラスといえるのかマイナスといえるのかが判別しがたい例もある。そして、基本

的に X のプラス、マイナスの方向性に Y も従うために、Y も解釈によってどちらともとれてプラスマイナスの判別がし難くなる。

- (64) あまりのボタンのサイズに縫い付けることができない。
 →サイズは大きくても小さくても OK。どっちにもとれる

(65)では、「あまりの筋肉に」で、筋肉が少ないという意味にはとりづらいため筋肉は過度にあると考えられる。筋肉が過度にあることと、ボディービルダーに見えることはそれぞれ、その筋肉をもつ本人と発話者それぞれにとって良いことなのか悪いことなのかの判断としてどちらの解釈も可能である。また(65b)は「あまりの筋肉」には筋肉が多いことが程度の方向性としては指定されているため、意味として矛盾が生じ容認度が下がる。

- (65) a. あまりの筋肉にボディービルダーかと思った。
 b. ??あまりの筋肉に弱そうだと思った。
 →筋肉 多い

(66)は、(66b)のように「あまりの見たさに」とした場合、ここでは「見たさ」というわかりやすい程度の方向性が提示してあり、目的語が不足しているものの「何かをあまりにも見たくて」という解釈は容易に可能である。ここで(66a)は、X となる映画の「見たさ」は話者のものではなく彼の感情であり、Y となる「山に登りたいのを我慢した」のは話者である。そして、彼があまりにも映画を見たい状態というのは、それ自体で言えば話者にとっては他人事である。それに起因して起こる結果としての Y に明らかな利害関係が話者にあれば話は別であるが、彼が映画を見たいかどうかということ自体に話者にとってプラス、マイナスの判断はし難い。Y となる「山に登りたいのを我慢した」も、話者にとってマイナスの解釈もできるし、そこに「どうしてもその日その時山に登りたい。登らなければならない。」といった特殊な事情でもなければ、山に登る代わりに彼と映画を見に行くということであるため、それなりに楽しめてプラスであろうということが伺える。仮に話者に特殊な事情があれば我慢せずに一人でも山に登るのではないかと考えられるため、Y もプラスマイナス両方の解釈が可能である。

- (66) a. あまりの彼の映画の見たさに山に登りたいのを我慢した。
 b. あまりの見たさに山に登りたいのを我慢した。
 →見たさ 大

(67)は、(67b)のように「あまりの光源に」とした場合、どんな光源なのか全くわからない。

程度の方向性として無理矢理ではあるが(67c)(67d)のように、ここでは「光源」ではなく光源の「不自然さ」またはこういう言い方は適切ではないように思われるが、「緑さ？」が過度に大きいのだと考えられる。そして、(67a)の「あまりの不自然な緑の光源」は話者に直接的に関係することではないと考えられるため、X はプラスともマイナスとも言えない。「宇宙人の襲来を想像した」という Y についても、想像することで話者にプラスになるともマイナスになるとも判断できない。

- (67) a. あまりの不自然な緑の光源に、宇宙人の襲来を想像した。
 b. ??あまりの光源に、宇宙人の襲来を想像した。
 c. ?あまりの不自然さに、宇宙人の襲来を想像した。
 d. ??あまりの緑に、宇宙人の襲来を想像した。
 →光源 ×。不自然さ 大 または 緑 大

(68)は、「あまりの歌いたさに」とあるが、Y で「奪い取る人もいる」という部分から「歌いたさ」が話者本人のものではないことを示唆している。よって、「ある人」のあまりにも歌いたい状況を表しているものであり、程度の方向性としては「歌いたさ」としてしっかりと指定されている。しかし、それが話者にとって、または「マイクを奪い取る人」にとって、プラスの状況といえるのかマイナスの状況といえるのか判別しがたい状況である。そして、「人のマイクを奪い取る人もいる」という Y は、それ自体話者に直接関係もなく第三者の事柄であり、しかも実際に起こったことではないために、プラス、マイナスの判別ができない。実際に起こった結果ではなく、こういう人もいるという一般化として捉えられるために、容認度も下がっている。

- (68) ??あまりの歌いたさに人のマイクを奪い取る人もいる。
 →歌いたさ 大

このように、それぞれ解釈の仕方によって、プラス、マイナスどちらにもとれる例をここではまとめている。以下の例についても同様である。

(69)では、「会いたさ」が、話者にとってプラスのことであるのかマイナスのことであるのか、想定される状況によって違ってくるものなので、どちらともいえないとしている。

- (69) あまりの会いたさに震えた。
 →会いたさ 大

(70)では、X である他人または場合によっては話者の「食欲」は極端にあることが伺えるがそのことは話者にとって良い場合も悪い場合も前提となる状況によって想定できるため、どちらともいえない例である。

(70) あまりの食欲に恐れをなした。
→食欲 大

(71) あまりのバンジージャンプの飛びたさに子供が駄々をこねていた。
→飛びたさ 大

またここでも、これ以降の例において「あまりの X に Y」で、「あまりの」の位置を置き換える場合、程度の方向性を示す部分により近接しているほうが、より話者の主観的な X の程度としての強さが増し、話者の X の強調の様子が伺える。(72)は、それぞれ(72d)の「あまりの時に」、(72e)の「あまりの流れに」どちらにしても良く意味が分からない文になる。「あまりの流れに」はどんな流れなのかもよくわからない例である。

- (72) a. あまりの時の流れの速さに驚きを隠せない。
b. ?*時のあまりの流れの速さに驚きを隠せない。
c. 時の流れのあまりの速さに驚きを隠せない。
d. *あまりの時に驚きを隠せない。
e. ??あまりの流れに驚きを隠せない。

(73)は、(73a.b.c)においてトカゲは足が速いという一方向にしかとれない。そのため一般的に足が遅いと考えられる「カメ」かと思うことは矛盾しており不自然である。(73d)のように「あまりのトカゲに」にしても意味不明である。(73e)の「あまりの足に」も同様におかしい文となる。

- (73) a. ?(意味的に)あまりのトカゲの足の速さに甲羅を脱いだカメかと思った。
b. トカゲのあまりの足の速さに甲羅を脱いだカメかと思った。
c. トカゲの足のあまりの速さに甲羅を脱いだカメかと思った。
d. *あまりのトカゲに甲羅を脱いだカメかと思った。
e. *あまりの足に甲羅を脱いだカメかと思った。

(74)は、(74b)のように「あまりの雰囲気」にした場合、程度の方向性として「雰囲気」のどんな特徴について過度で極端だと述べているのかは不明瞭である。これは「過度な雰囲気」

というのが何を表しているのかわからないことから言える。しかしながら、「あまりの雰囲気に」で、なにか「すごい」様子や、尋常でない雰囲気ということは想定可能である。ここでは(74a)のように「不思議な」という方向性を持たせていることで、より「雰囲気」の持つ性質が明確になっている。

- (74) a. あまりの絵の不思議な雰囲気に飲み込まれそうになる。
b. あまりの雰囲気に飲み込まれそうになる。

(75)は、(75b)のように「あまりの変化に」とした場合、程度の方向性として「変化」は大きかったことが伺える。ここでは、(75a)で「彼女の体重」が極端に重くなっているのか軽くなっているのかわからないが、その「変化」は大きかったのだらうと予想できる。

- (75) a. あまりの彼女の体重の変化に戸惑いを隠せない。
b. あまりの変化に戸惑いを隠せない。
→変化 大

- (76) a. あまりの像の大きさに驚いた。
b. 像のあまりの大きさに驚いた。
→大きさ 大⇔小 両方可能

3.1.4. まとめ

ここまでの例で、「あまりの X に」は、X となる要素のある特徴の「程度の方向性」が極端であることを示している。そして、原因となる X の程度の高さ、つまり極端さに起因して当然の結果として Y が起こるということを述べた表現である。そのため、X に関して話者にとってプラス/マイナスな事柄などの解釈の方向性が定まっている場合、話者にとってプラスのことという解釈の X であれば Y についてもプラスの解釈が行われる。一方で、話者にとって X がマイナスのことであるという解釈であれば Y についてもマイナスの解釈となる。

また、主張(8b)にあるように、「あまりの X に」で、「あまりの」の位置を置き換える場合、「あまりの」が X に隣接しているほうが、「あまりの」と X の間に修飾するものが挟まれている場合よりもより話者の主観的な X の程度としての強さが増し、話者の X の強調の様子が表れている。そして、程度の方向性が内包されていない X で修飾する部分に程度の方向性を示す表現がある場合、方向性を示す表現にあまりが隣接していると、同様に程度の強さが強調される。

3.2. 「あまりの X に」が、容認しにくい例

「あまりの X に」が容認しにくい例は少ない。そのため、以下は例外とも考えられる例であるが、今の段階ではなぜこれらの例が容認しにくくなっているのかについてはうまく説明できていないのが現状である。しかしながら、容認不可能となってしまうのが、「あまりの X に」という構文の特性によるものなのか、単に意味の解釈上での問題なのかは明らかではないため、本論文では、例示に留める。(77)では、(77b)のように(77a)の程度の方向性の指定と考えられる「不足」を除いて考えると、この場合力は弱いのではなく、逆に強い(強すぎる)ように解釈できる例である。

- (77) a. *あまりの力不足に患者を助けられなかった。
b. ??あまりの力に患者を助けられなかった。

(78)の、「道草」というのは、そもそも程度の問題なのか不明な例である。「あまりの道草」という言い方そのものに問題がある可能性もある。過度な道草または極端な道草と言っても、程度の方向性として不明であり、どんな道草なのかが想定できないため、容認しにくいのではないかと考えられる。

- (78) *あまりの道草(をしたこと)に迷った。

(79a)は、ひどい突き指に思える例である。「あまりの突き指に」という言い方を一般的にしないため容認しにくいのではないかと考えられるが、断言はできない。(79b)のような言い方であれば容認可能である。

- (79) a. *あまりの突き指(をしたこと)に試合に勝てなかった。
b. 突き指をしたあまり試合に勝てなかった。

(80)は、(80b)のように「世間知らず」を「知識」に置き換えた場合、「知識」はあるかなにかなら、過度にあるといえる例である。(80a)(80b)ともに容認不可能である。また、ここでは「~だろう」として、過去実際に起こったことはなく話者の予想であるため、実際には起こっていないことであるため言い方によっては未来ともいえる。容認しにくい理由として、実際に起こっていないからではないかとも考えられるが、断言はできない。

- (80) a. *日本では、あまりの世間知らずに命を落とすことはないだろう。
b. *日本では、あまりの知識に命を落とすことはないだろう。

(81)は、「多くを求めたこと」という X について、基本的に「あまりにも多くを求めること」というのは良くないことであると考えられるためマイナスの方の解釈が強い。しかし、解釈によってはアグレッシブであるとして、無理をすればプラスととれなくもない。プラスの方の解釈で考えた場合、Y がマイナスの解釈しかできないため主張(6b)に反するため容認不可能であるという風にも考えられるが、「あまりの多くを求めたことに」という言い方が不自然であるためとも考えられる。

- (81) *あまりの多くを求めたことに全てを失った。

「あまりの X」について先行研究として、前述した服部(1993)は、補説で「あまりの N」、「N のあまり」、「V あまり」について触れており、名詞類を修飾する「あまりの」は、意味的にはここでいう過度型に対応する用法のみと述べている。

「あまりの N」に関して、服部(1993)は、修飾される名詞は「熱心さ、暑さ、働きぶり」のように程度を表す名詞が多いが、他に形式名詞「こと」、「しうち」、「言葉」など普通の名詞の場合もあるとしている。実例では、「あまりの N に + 述語」の形がほとんどで、述語はある対象についての N(又は N の一性質)の度合いが、主体が平常の状態に対処する限度を超えたために自然に生じた特別な反応を表すものがほとんどであることを述べている。そして、その反応は困惑、驚き、戸惑い、不安のような通常起こらぬほうが良い人間の反応や、やむをえずとった行動などである例が多いとしている。

- (82) 幕末に下田沖で沈没したロシアの黒船ディアナ号にまつわる歴史を追って、昨年末、静岡だけにとどまらずソ連へも足を運んだが、あまりの寒さに大弱り。
[服部 1993: 470]

- (83) 今日わたしたちが読むことのできるそれらの歌の数々を読めば、それらはあまりの平凡さにかえって驚かされるというようなものである。

[服部 1993:470]

- (84) あまりの残酷さに、息をのむ。犯人の心の動きを理解することは、とうていできない。
[服部 1993:470]

- (85) 「若い女の子には無理ですよ」と断ったが、あまりの熱心さに、アルバイト気分で引き受けた。
[服部 1993:470]

- (86) 来る日も来る日もスコップやツルハシを持っての土方仕事、モッコ担ぎで、あまりのつらさに級友と謀って仮病でさぼり、おふくろがつくってくれたおにぎりを朝のうちに食べてしまったりしました。 [服部 1993: 470]

ここで述語には、「～に驚く」、「～に戸惑う」のように本来ニ格をとる、従って「寒さに驚く」と言えるものと、「?つらさに仮病でさぼった」のように本来はニ格を取りえずこのパターンで例外的に「～ニ」と共起するものがあることを述べている。

服部(1993)は、以上の例の使用条件は3.2の『理由や原因を表す節などにおける「あまり」』[服部(1993.p463)]に近いが、例えば(87)で、(87b)のようには言えないと述べている。これは、こうした「～ニ」が(87b)のようにある対象についての一般的な評価を表す述語とは共起しないことによるものであるとしている。

- (87) a. この映画はあまり残酷なので子供には見せられない。 [服部 1993:470]
b. ?この映画はあまりの残酷さに子供には見せられない。 [服部 1993:470]

(88)(89)のように二格以外の助詞を伴う例もあり、Nの過度さによって、通常でない結果が生じたことを表すものである。

- (88) 日本一のツインタワービル「ゲートタワー」(高さ250メートル)の完成が、あまりの高層工事のため1993年春の開港に間に合わないことがほぼ確実になった。
[服部 1993:470]

- (89) 別のスナックでは、壁飾りなどが倒れたり、歌っていた客があまりの揺れで、その場に座り込む姿も見られた。 [服部 1993:470]

以上のいずれにも当てはまらないものとして以下の例を挙げられていた。

- (90) 政府・自民党のあまりの横暴さは、首相の交代で帳消しにできるものではないからである。 [服部 1993:471]
(91) だから、アジア文学はほとんど出版されてない。あまりの少なさを嘆いて、あえて手がける出版社がいくつかあるだけだ。 [服部 1993:471]

4. 「XのあまりY」について

主張の(7)をもう一度提示する。

- (7) a. 「XのあまりY」について、Xの過度な感情、状態により起こる話者自身でも意外な結果としてのYにより、Yはマイナスの結果になる。
b. 「XのあまりY」は、Xに起因して我慢ができずにYしてしまったというような、衝動性があり、冷静な判断を欠いた状態を表す。意外性や驚きも内包する。
c. Xはその時、瞬間的なもので、Yと同時性があるため、過去ではない。
d. 話者の主観的な程度の強さとして「あまりのX」 < 「Xのあまり」になる。

「XのあまりY」は、Xの過度な感情や状態が原因で、自分でも意外な結果としてYという事象が起こってしまうような後悔の感情を伴うのだが、(7)の条件を考えることで、以下のように整理することが可能となる。

4.1. 容認可能な「XのあまりY」

「XのあまりY」で、主観的な感情、感覚を伴うものが容認可能となるのは、その時の話者の「感情」が聞き手または読み手に対して直接伝わるため、「XのあまりY」と主張(7b)にある衝動性と繋がりやすいためである。主観的な感情を伴うものが衝動性と繋がりやすいのは、「衝動」というものは「その時」の話者の「感情」が発端となって発生するためである。そして、冷静な判断を伴わずに衝動的に起こした行動というのは多くの場合において、後から振り返り後悔のような感情を抱くことが多い。(92)は、「痛さ」という主観的な感情(感覚)を伴うものであり、「痛さ」の程度の大きさとして大きく、あまりにも痛すぎたために、思わず(衝動的に)泣いてしまったという話者の衝動性ともつながる。

- (92) 痛さのあまり泣いてしまった。

(93)は、「楽しさ」という主観的な感情を伴うもので、程度の大きさとしてあまりにも楽しすぎたことで時間を忘れるほどだったという例である。

- (93) 楽しさのあまり時間を忘れた。

(94)は、「嬉しさ」という主観的な感情を伴うもので、程度の大きさとしてあまりにも嬉しすぎたせいで思わず飛び上るほどだったという例である。

(94) 嬉しさのあまり飛び上がった。

(95)は、「悲しさ」という主観的な感情を伴うもので、程度の大きさとしてあまりにも悲しすぎたせいで、何も考えられないという状態に陥ったという例である。

(95) 悲しさのあまりなにも考えられなくなった。

以下の例も同様に、Xという主観的な感情を伴うもので程度の大きさとしてXが極端であったためにYとなっているものである。

(96) 会いたさのあまり震えた。

(97) 足の痛さのあまり座り込んだ。

(98) ?眠さのあまり起きていることができなかった。

(99) ?酒の飲みたさのあまり断酒を破ってしまった。

(100) ?走りたさのあまりマラソンに出場した。

(101) 可愛さのあまり抱きしめそうになった。

(102) 美しさのあまり息をのんだ。

(103) おいしさのあまり無表情ではいられなかった。

(104) 好成績のあまり二度見した。

(105) 非常識さのあまり思わず手がでた。

(106) 空腹のあまり石がおいしそうに見えた。

(107) 試験のわからなさのあまり投げ出した。

(108) 重さのあまり手が折れるかと思った。

(109) ?複雑さのあまり投げ出したくなった。

(110)や(79b)は、これまでの例と異なり X が名詞ではなく動詞の例ある。この場合も、X に関しては話者の主観的な感情、感覚に関わっていると考えられる。(164)に関しても(79b)に関しても、「多くを求めた」ことや「突き指をした」ことが、主観的な感情・感覚とも、主観的や客観的な評価・判断によるものとも解釈可能である。

(110) 多くを求めたあまり全てを失った。

(79b) 突き指をしたあまり試合に勝てなかった。

以下(111)-(114)は、第三者的な物事であり、本論文では触れなかった点である。ここではXの過度な感情にあたる部分が話者のものではなく、第三者のものである。そのため、それに起因して起こるYには話者の直接的な感情は関わっていない。例えば(111)の例でいえば「話者の恐怖」なのではなく「犬の恐怖」であるために、話者の感情や感覚とは直接関係がない

(111) 犬が雷の恐怖のあまり震えていた。

(112) バンジージャンプの飛びたさのあまり子供が駄々をこねていた。

(113) ?歌いたさのあまり人のマイクを奪い取る人もいる。

(114) ?*彼の映画の見たさのあまり山に登りたいのを我慢した。

4.2. 評価や判断を伴わない客観的な状態なら容認不可能である。

「Xのあまり」で、評価、判断を伴わない客観的な状態が容認不可能になるのは、Xに程度の方向性が指定されていないからであり、Xの程度としての極端さ、意外さがわかりづらいためである。程度の方向性が内包されていないというのは、(115)でいえば、「成績」というXが、「良い成績」なのか「悪い成績」なのかがどちらにもとれて判断できないということである。それに加えて、「成績のあまり」と言っておきながら、「成績」と、話者の感情・感覚も評価・判断も含まれていない中立的で客観的な状態であるため、過度な状態というものをXが表すことができない。主張の(7b)で言うような話者やYの主語の人

物の衝動性や冷静な判断を欠いた状態ということも起こりえない。前述したが(115)で、「あまりの成績に」は極端に良い成績だったのか極端に悪い成績だったのかわからない。また、「成績」には、人の「評価、判断」が一切含まれていない客観的なただの状態であるため、人の感情というものが関わっていない。話者の判断が一切なされていない X から、過度さを感じることは難しく、その X すなわち「成績」の極端さに起因して話者が主張(7b)にあるような衝動性を感じたり我慢ができなくなるというようなことは想定しがたい。そのため、「評価、判断」を伴わない客観的な状態では容認不可能になるということが考えられる。

(115) *成績のあまり二度見した。
→「成績」

以下の説明も同様に評価、判断を伴わない客観的な状況は容認不可能である。(116)で、「状況」は、「良い状況」なのか「悪い状況」なのか、またその良し悪しに限らず「どんな状況」なのかが言及されておらず、判断できる程度の方向性が示されていない。そして、その「状況」そのものには人の「評価、判断」が含まれておらず客観的な状態であるといえる。

(116) *状況のあまり混乱した。
→「状況」

(117) *状況のあまり順調さを感じた。

(118) *状況のあまりとても嬉しくなった。

(119)(120)で、「筋肉」は、過度にあるのかなのか、またどんな筋肉なのか、程度の方
向性が示されていない。そして、「筋肉」というものに話者の評価・判断は含まれていない。

(119) *筋肉のあまり弱そうだと思った。
→「筋肉」

(120) *筋肉のあまりボディービルダーかと思った。

(121)では、(121a)のように前半に「絵の不思議な」と詳細な説明をつけることで、X を話者が判断する上で冷静に判断しているような余裕も感じられ、話者が後から冷静な判断を

下していることがわかる例である。そのため衝動性も感じられない。また、(121b)のように「雰囲気」自体にも程度の方向性や話者の「評価、判断」は含まれていない。

(121) a. ??絵の不思議な雰囲気のあまり飲み込まれそうになる。
b. *雰囲気のあまり飲み込まれそうになる。

(122)は、(122a)のようにどんな発言なのか説明する余裕があり、それほどまでの衝動性は伺えない。また、(122b)のように「発言」にも「評価・判断」は含まれていない。

(122) a. ??ありえない発言のあまり怒りを覚えた。
b. *発言のあまり怒りを覚えた。

(123) ??堂々とした態度のあまり威圧された。

(124)は、(124a)では「目を疑うような」と説明が長く、後から振り返り冷静に判断を下していると考えられる。(124b)のように「光景」も「評価・判断」が含まれない客観的なものである。

(124) a. ??目を疑うような光景のあまり眼科に行こうと決意した。
b. *光景のあまり眼科に行こうと決意した。

(125)についても同様で、「道の込み具合」と「ルートを変更した」と、話者は X についても Y についても冷静な判断を下していることが伺える。話者の X に触発された過度な感情も感じられない例である。またここで、「道の込み具合」を 5.2 と分類しているが、「評価・判断」が含まれていない客観的な状態でも、「評価・判断」が含まれるほうの解釈でも両方解釈可能であるため、これは 5.2 の「評価・判断」を伴わない客観的な状態と、5.4 の「評価・判断」に修飾するものが含まれるもので判断がわかるものである。

(125) a. ??道の込み具合のあまりルートを変更した。
b. *込み具合のあまりルートを変更した。

(126) ??*態度のあまり驚いた。

(127)は、(127a)のように「彼女の体重の変化のあまり」と、後から冷静に説明をつけているため衝動性はないと考えられる。(127b)のように極端な「変化」は「評価・判断」を伴

わない客観的な状態と判断できる。以下の例についても同様である。

- (127) a. *彼女の体重の変化のあまり戸惑いを隠せない。
b. *変化のあまり戸惑いを隠せない。

- (128) a. *物語の飛躍した展開のあまりついていけない。
b. *展開のあまりついていけない。

- (129) a. *不自然な緑の光源のあまり、宇宙人の襲来を想像した。
b. *光源のあまり、宇宙人の襲来を想像した。

- (130) a. *毛先の自在な動きのあまり感動した。
b. *動きのあまり感動した。

(131)は、(131c)のように「剣の作りの精巧さのあまり～」として分類として5.4の「評価・判断」に修飾するものが加わるものに分類できるものに変換される場合、容認可能性が若干ではあるが上がる感じがする。このことは、容認できなくなる要素として、5.2の「評価・判断」を伴わない客観的な状態の方がより容認不可能性が高いことを示唆している。

- (131) a. *剣の精巧な作りのあまり職人の心を感じた。
b. *作りのあまり職人の心を感じた。
c. ??剣のつくりの精巧さのあまり職人の心を感じた。

- (132) *彼の宇宙の広大さのアピールのあまり疲れてしまった。

4.3. 「評価、判断」単体なら容認可能である。

「Xのあまり」のXの部分が、修飾するものが付属していない「主観的または客観的な評価、判断」である場合、容認可能である。ここで修飾するものが付属していないと指定しているのは、5.4節にも関わっていることなのだが、話者が冷静な判断をしていないというような話者の衝動性や、後から冷静に振り返っているわけではなくYは「その時」起こったことであるというような、主張(7c)に関わっている問題である。例えば(133)では、Xにあたる「力不足」という自分または他人からの「評価、判断」により、Yにあたる「患者を助られなかった」という結果になっている。「力不足」というのは、話者本人または他人の「判断・評価」である。

- (133) 力不足のあまり患者を助られなかった。

(134)は、Xにあたる「道草」という話者の「評価、判断」により、Yにあたる「迷った」という結果になっている。

- (134) 道草のあまり迷った。

以下も同様にXという話者の「評価、判断」により、Xという結果になっている例である。

- (135) 突き指のあまり試合に勝てなかった。

- (136) 日本では、世間知らずのあまり命を落とすことはないだろう。

- (137) 無知のあまり過ちをおかすこともある。

- (138) ?第一印象のあまりほかの人の存在が霞んだ。

- (139) ?第一印象のあまり誰も彼女の存在を覚えていなかった。

- (140) ??不調のあまり不安になった。

主張の(7a)に従えば、Xに関わらずYはマイナスの結果となるはずである。しかしながら、(141)では、「合格を確信した」というYの部分が話者にとってプラスの結果になっている例である。そして、(142)は主張に従い「落ちたと思った」というマイナスの結果としてのYになっているのに加え、「手応え」は分類するとすれば5.1節にあたる話者の感覚、またはこの5.3にあたる「評価・判断」である。5.1節でも5.3節でもどちらも容認可能になるはずなのだが容認できていない例である。

- (141) ?手応えのあまり合格を確信した。

- (142) *手応えのあまり落ちたと思った。

これらの現象に関しては、今後考察を続ける必要があるだろう。

4.4. 「評価、判断」に修飾するものが加わると容認度が下がる。

「評価、判断」するものに修飾するものが加わった場合、文の容認度が下がるのは、過去の事柄に対して、話者が説明を加える余裕が見受けられるためであり、主張(7c)にあるように『Yと同時性がある「その時」のこと』ではなくなるためである。したがって、主張の(7c)と矛盾することとなる。話者の衝動性も低くなると考えられるため、容認性は低くなる。(143)は、Xにあたる部分が話者の「評価、判断」である「真剣さ」単体ではなく、修飾して「主張の真剣さ」として「主張の」という説明を加えることにより、話者の余裕や後から振り返って冷静に説明を加えている様子が伺える。この場合「その時」のことといった同時性はなく、冷静に判断できる過去のことである。この点が(7c)に反するため容認度が下がると考えられる。

(143) ?主張の真剣さのあまり、認めざるを得ない。

以下の例も同様に説明できる。(144)は、「多様さのあまり」ではなく「データの」と説明を加えられていることから、話者のその時点での判断ではなく話者が後から冷静に判断していることが伺える。

(144) ?データの多様さのあまり一般化できずにいる。

(145)は、「期待のあまり」ではなく、「過度な」とより詳しい説明を加えることにより、話者が「その時、その瞬間に」感じたことではなく、冷静にあとから「こういうことである」と述べている様子が伺える。

(145) ?過度な期待のあまり潰されそうになる。

以下は容認不可能な例である。

(146) ??荷物の重さのあまり腰を痛めた。

(147)は、(147b)のように5.3節の「評価・判断」を伴うものに分類される「強さのあまり(敵に)おじけづいた。」とかなら「その時」である様子が伺え、容認可能である。この(147a)の場合、「敵の」と少し冷静に説明を加えてしまっているため、容認度が下がる。

(147) a. ??敵の強さのあまりおじけづいた。
b. 強さのあまり(敵に)おじけづいた。

(148)も同様に(148b)のように5.3節に分類される「大きさのあまり像に驚いた。」とかであれば容認可能である。

(148) a. ??像の大きさのあまり驚いた。
b. 大きさのあまり像に驚いた。

(149)も同様に、(149b)のように5.3節に分類される「かっこよさのあまりメガネに惚れた。」なら容認可能である。

(149) a. ??メガネのかっこよさのあまり惚れた。
b. かっこよさのあまりメガネに惚れた。

(150)は、例えば「遅さのあまり腹が立った。仕事が遅すぎる。」などであれば容認可能である。

(150) a. ??仕事の遅さのあまり腹が立った。
b. 遅さのあまり腹が立った。仕事が遅すぎる。

(151) ??緑の多さのあまり感激した。

(152)は、特に意外な結果と感じない例である。

(152) ??髪の薄さのあまりアデランスを勧められた。

(153) ??人の多さのあまり気分が悪くなった。

(154)は、「音の」という部分が、説明を後から加えている様子が伺えることと、「～だろう」という部分がまだ起こっていない未来のことを予想していることが伺えるため、共に主張(7c)に反している。

(154) ??音の繊細さのあまり誰もが聞き惚れるだろう。

(155) ??彼の頼りなさのあまり心細くなった。

(156) ??祖父の頭の堅さのあまりため息がでた。

(157) ??手際の悪さのあまり手伝いをしていた。

(158) *?家の遠さのあまり気が遠くなった。

(159) *?道の多さのあまり困惑した。

(160) *?ボタンのサイズのあまり縫い付けることができない。

(161) *?物の知らなさのあまり勉強が必要だと感じた。

(162)は、(162b)のようにすると容認度は少し上がる。また、飛行機の「大きさ」は、誰が見ても大きいというような「評価・判断」を伴わない客観的な状態としての解釈も可能であるし、人によって「大きい」という判断がわかれるという状況も想定可能である。つまり5.2節と5.3節に判断がわかるとい解釈も可能であるまた、主張の(7a)に反し、Yがプラスの結果になっていることも容認度が下がる理由の一つである。

(162) a. *飛行機の大きさのあまり甥が喜んでた。

b. ?*(飛行機を見ていて)大きさのあまり甥が喜んでた。

(163) *根拠のない嫌疑のあまり被告はすぐに無罪が証明されるだろうと確信していた。

(164) *時の流れの速さのあまり驚きを隠せない。

(165) *トカゲの足の速さのあまり甲羅を脱いだカメかと思った。

4.5. 分類の判断が分かれるもの

Xが「評価、判断」を伴う状況なのか伴わない客観的な状態なのかという点で、5.2節と5.3節に判断が分かれる。ここでも(7)に従っている。ここで、前述した分類分けとして、5.2節の評価判断を伴わない客観的な状況なら容認不可能であるが、5.3節の評価判断を伴う状況なら容認可能である。(166)の「騒音」に関しては、騒音には誰が聞いても騒音と感

じるような状態ととらえられるレベルのものもあれば、同じ音でも人によって「騒音」と感じる場合と「感じない場合があるような判断が分かれるレベルのものが存在する。そのため、「評価判断」を伴う場合、伴わない客観的な場合のどちらの解釈も可能なものであるので、どちらでもあるといえる。つまり、判断が分かれる例である。

(166) ??騒音のあまり耳を覆った。

(167)は、「惨劇」が、評価判断を伴う状況なのか伴わない状況なのかという点で判断が分かれる例である。評価判断を伴わない客観的な状況なら容認不可能であり、分類には一致するものの、「惨劇」というものが個人によって「惨劇」と感じるかどうか判断が分かれるような「評価・判断」を伴う場合の可能性が残されているのではないかという様にも個人的には考えているため、ここに分類している

(167) *惨劇のあまり目を覆った。

(168)も同様に、「食欲」が「評価・判断」を伴うものなのか伴わない客観的な状態なのかという点で判断が分かれる例である。本論文では「評価・判断」を伴わない客観的な状況なら容認不可能としており、分類としてはそこに一致するものの、「食欲」というものが「評価判断」を伴わないとは言いつれないのではないかという様にも個人的には考えているためここに分類している。

(168) *食欲のあまり恐れをなした。

(169)も同様である。

(169) *誠意のあまり感動した。

以上から、「Xのあまり」に関しては、主張の(7)に従い、その中で大きく分けると以下のように分けられる。まず、主観的な感情を伴うものなら容認可能である。評価、判断を伴わない客観的な状態なら容認不可能である。主観的や客観的な評価・判断を伴うものでは、容認可能だが、それに修飾するものが加わると容認度が下がる。分類において判断のわかれるものなどどちらにもなりうる例も中には含まれているため、この分け方よりもより適した分類の方法もある可能性はあると考えられる。

ここでも先行研究として服部(1993)では、「Nのあまり」、「Vのあまり」に関して、「N

のあまり+述語(句)」で N は述語の主体(通常人間ないしこれに準ずる活動主体)の性情を表すものに限られるとしている。その点で「あまりの N」との相違があり、(170a)と(170b)の相違が生じると説明している。

- (170) a. (相手の)あまりの強さに驚いた。 [服部 1993:471]
b. ?(相手の)強さのあまり驚いた。 [服部 1993:471]

N の度合いが過度であることにより主体が通常と異なる行為や状態を取るに至ることを示し、実例では N は「興奮、ショック、退屈、感動、うれしさ、悲しみ、懐かしさ、驚き、無念、ひもじさ」といった人間の心的・感覚的状态や「過労」のような身体的な状態を表すものが極めて多いことを述べている。ここでの例は省略する。

- (171) 逮捕された 3 人が今春卒業した中学校の校長は 26 日朝、「驚きのあまり言葉がない。被害者の方に対しておわびのしようがない」と肩を落とした。
[服部 1993:471]

- (172) こんな異境の地で、日本の子供に会えるとは、懐かしさとうれしさのあまり駆け寄って「こんな山道を 1 人で歩くのは危ないよ。怖くないの」と尋ねると、「ちっとも怖くない」と答える。
[服部 1993:471]

- (173) 過労のあまり母の両手の指が内側に曲がってしまった。
[服部 1993:472]

他に人間や団体などの活動体の継続的な態度・方針などを表す名詞の例があるとして以下の例を挙げている。

- (174) かつて思想重視のあまり物質面を抑制しすぎて人びとのやる気をつぶしたことへの反省から、豊かになるためには、と多少手綱を緩めたのは確か。
[服部 1993:472]

- (175) この事件をこれまで公表しなかったことについて、喜多正則・警視庁刑事総務課長は「巡査長の行為は職務熱心のあまりであって、免職という社会的制裁も受けた。
[略] [服部 1993:472]

また、「動詞句(動詞はル形)+あまり～」の形の表現もあり、やはり同一主体に関して

動詞句の表す事柄が過度であることが後続の動作や状態を引き起こすことを表すが、後続の動作や状態は望ましくない事柄にほぼ限られるようであることを述べている。寺村(1980)が指摘するように、動詞句は「意志感情を表す動詞であるのが普通」と述べている。

- (176) 時代の流れは物の豊かさを追求するあまり、何か大事なものをわすれてきてはいないだろうか。
[服部 1993:472]

- (177) 子供のころ、ディズニーランドとアメリカにあこがれるあまり“密航”を企て、補導されたこともある。
[服部 1993:472]

5. 「あまりのX」 < 「Xのあまり」となる場合

(7d)にある通り、Xの話者にとっての主観的な程度は、「XのあまりY」が「あまりのXにY」よりも大きくなる場合がある。例えば、(178)の解釈の違いをみて欲しい。ここで抱きしめてしまったものは、例えば売物のぬいぐるみや他人の子どもなど、一般的に気軽に抱きしめないものなどを想定してほしい。

- (178) a. あまりの可愛さに抱きしめてしまった。
b. 可愛さのあまり抱きしめてしまった。

(178a)の「抱きしめてしまった」は、当事者にとって悪い結果ではなく「あまりにも可愛すぎて抱き締めてしまうくらい可愛かったんだよ。」という「可愛さ」の強調であり、解釈によって話者の喜びの感情すらも伺えるだろう。ここには話者の後悔などのような感情はあまり伺えない。しかしながら、(178b)は、話者にとって「抱きしめてしまった」という行為は、自分でも予想していなかったものであると考えられる。この(178b)に対して、(178a)の場合は、「抱きしめてしまった」という行為自体を話者自身が自分で予想しているかどうかは関係ない。このため、(178a)の場合と比べて、(178b)は話者にとってより意外な結果という印象を受ける。話者が過度な「可愛さ」に触発され、思わず「抱きしめてしまった」という、話者の衝動的に思える行為により、(178b)では話者の衝動性も伺える結果となる。そして、ここでは「可愛さ」は、言ってみれば「あまりにも可愛かったせいで抱きしめてしまった。」というような、話者が衝動的に「(うっかり)抱きしめてしまった」ことへの一種の後悔や言い訳のような印象にもとれ、話者のマイナスな感情が伺える結果になる。また、文の中で一番強調されている箇所はどこかと問われれば、(178a)は、「可愛さ」が一番強調されているのに対し、(178b)は、「抱きしめてしまった」が一番強調されている。

6. まとめ

本論文では、「あまりのX」、「Xのあまり」に焦点を当てて考察を進めた。これらは容認度に差が出ず置き換え可能な場合と容認度に差が出る場合が存在する。「あまりのX」、「Xのあまり」それぞれの文について観察することによりそれぞれの文が持つ特徴や法則性を見出した。「あまりのXにY」、「XのあまりY」という構文の観察を通して、アマリは、(6)~(8)の特性があると主張した。再度主張の(6)~(8)を提示する。

- (6) a. 「あまりのX」の文は基本的に容認可能である。
b. 「あまりのXにY」について、プラスの原因のXにはプラスの結果のY、マイナスの原因のXにはマイナスの結果のYになる。
c. XはYの時点で過去の事象であっても良い。
- (7) a. 「XのあまりY」について、Xの過度な感情、状態により起こる話者自身でも意外な結果としてのYにより、Yはマイナスの結果になる。
b. 「XのあまりY」は、Xに起因して我慢がでせずにYしてしまったというような、衝動性があり、冷静な判断を欠いた状態を表す。意外性や驚きも内包する。
c. Xはその時、瞬間的なもので、Yと同時性があるため、過去ではない。
d. 話者の主観的な程度の強さとして「あまりのX」 < 「Xのあまり」になる。
- (8) 「あまりのXにY」は、文中で意味的にXが強調され注目されるのに対し、「XのあまりY」は文中で意味的にYのほうが注目される結果となる。

観察したほとんどの例において、この主張が適用されることがわかった。この主張に加えて「あまりのXにY」で「あまりの」の位置を置き換えた場合、「あまりの」がXに隣接しているほうが、「あまりの」とXとの間に修飾するものが挟まれている場合よりも、よりXが強調されることが観察できた。また、これに対し「XのあまりY」は「あまり」の位置は置き換え不可能であることも併せて確認できた。この主張で説明がつかない例外的な点については、今後の課題である。本論文では、この主張から「あまりのX」、「XのあまりY」のそれぞれの特徴と違いが明らかにされたことになる。アマリの用法には今回本論文では扱っていない用法があるが、本論文での考察でわかったことはアマリの特性を明らかにできた。

参考文献

- 葛 金龍(2004)『日中程度副詞「あまり」と“太”の対照研究』国際文化学 第 10 号：73－86. 神戸大学国際文化学会
- 新藤一男(1983)『「あまり」の文法』山形大學紀要(人文科学) 第 10 巻第 2 号：101－113. 山形大學
- 須賀一好(1992)『副詞「あまり」の意味する程度評価』山形大學紀要(人文科学)第 12 巻第 3 号：35－46.山形大學
- 西 真理子(2005)「話者の前提と陳述副詞—従属節に生起する副詞を例に一」北海道大学留学生センター紀要 第 9 号：39－52. 北海道大学留学生センター
- 服部 匡(1993)『副詞「あまり(あんまり)」について—弱否定および過度を表す用法の分析—』同志社女子大學學術研究年報 第 44 巻(4)：451－47.同志社女子大學
- 東瀬戸正人(2000)『「程度副詞」における程度性の変遷について—「あまり」と「あまた」を中心に—』別府大学国語国文学 42：162－178. 別府大学国語国文学会(編)
- 李 楠(2000)『中国語副詞“太”と日本語副詞「あまり」』無差 第 7 号：85－93. 京都大学日本語学科(編集)